

金魚ねぶた

祭礼(ねぶた)用金魚ねぶた(標本番号H36215、高さ/19cm 幅/27cm 奥行/32cm)

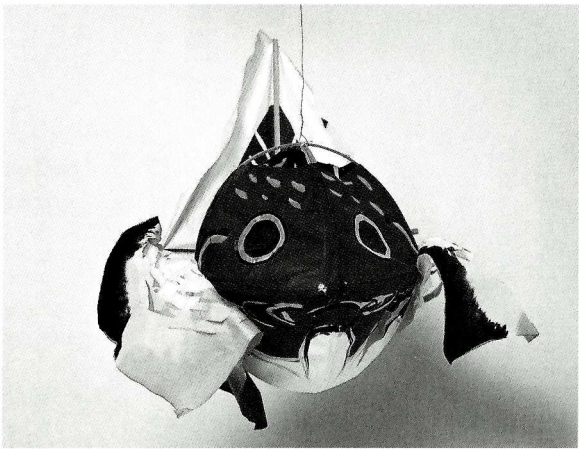
丹野 正 (たんの ただし)

弘前大学教授

八月初旬の青森県津軽地方では、青森市の大型組ねぶた、弘前市の扇ねぶた、五所川原市の巨大な立ちねぶたなどが宵闇よいやみのなかに華やかな姿をあらわし、浴衣や法被姿はっぴの群集と囃し手とともに街なかを練って行く。

表紙の金魚ねぶたは、このねぶた祭りに彩りを添える脇役である。祭りが近づくと駅のホームや商店街には多数の金魚ねぶたが吊り下げられ、ムードを盛り上げる。青森駅では改札口近くのホームに巨大な金魚ねぶたを飾り、観光客を迎える。むかしはこうした大きな金魚ねぶたが、さまざまな姿かたちの組ねぶたのひとつとして作られていたという。弘前では現在も、主役の扇ねぶたの前方を進む「前ねぶた」として、この種の金魚ねぶたが登場することもある。

また祭りの夜には、表紙のタイプの金魚ね



ぶたを棒の先に吊るし、なかに小口ウソクや豆電球を灯してもち歩く人もいる。行列のなかの子どもがこれを手にはしていると、沿道の観客から「メンコイ」「かわいい」と拍手がおこる。

さらに、小型の金魚ねぶたもある。浴衣姿の参加者は豆絞りの鉢巻にこれをかんざしのように挿している。子どもや女性にはよく似合う。行列中のわたしたちもこれを数本挿して歩き、観客のなかの幼児にそれらをあげるのである。

弘前では数年前まで、毎年五月になると金魚売りのお爺さんが天秤棒あまのぼうを担いで街なかを例の売り声をあげながら歩いてきた。城下町弘前と、その近郊には鯉や金魚が泳ぐ池と庭木を配した家が多い。こうした土地柄が金魚ねぶたの由来に関連しているのであろう。